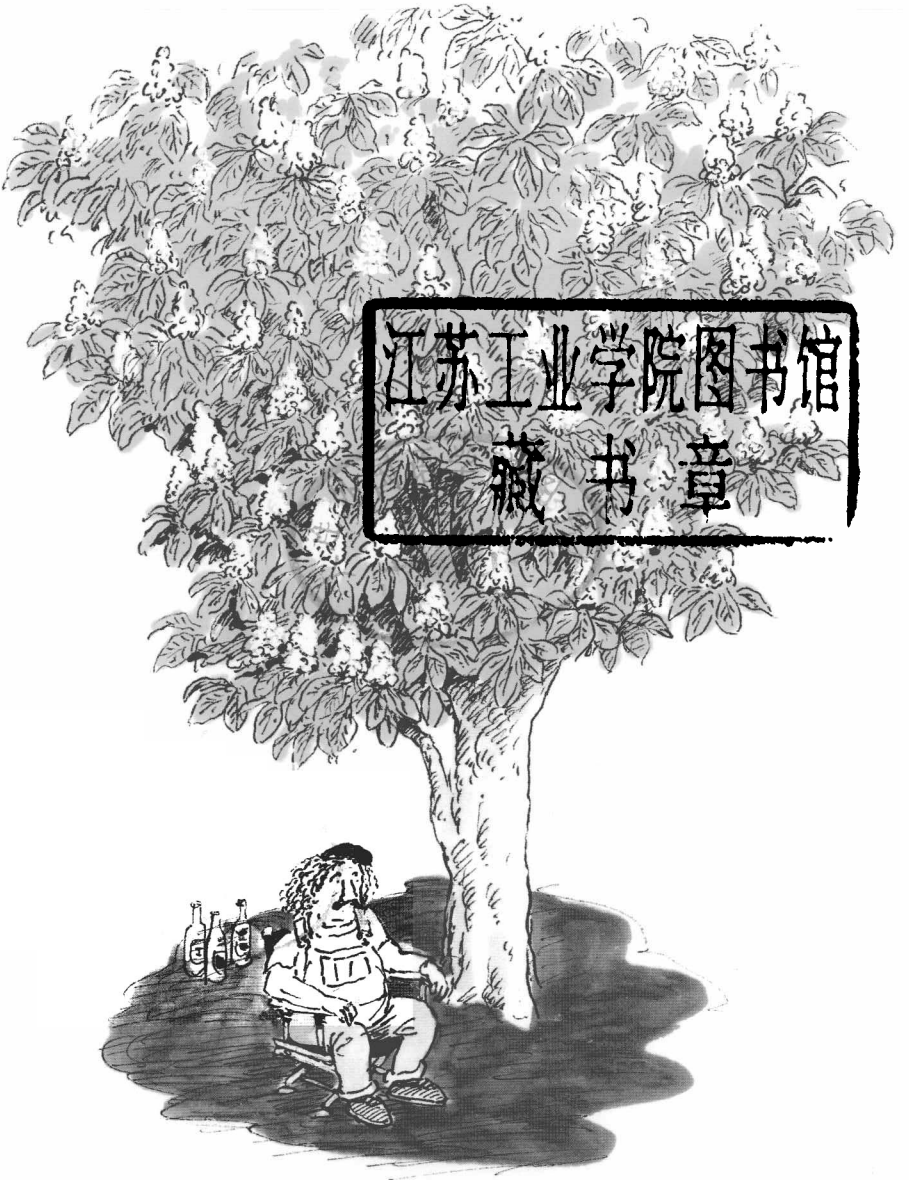
にじ色のガラスびん

M. ピクマル作　南本 史訳　むかいながまさ画

にし色のガラスびん

M. ピクマル作　南本 史訳　むかいながまさ画



江苏工业学院图书馆
藏书章

あかね世界の文学シリーズ

訳者紹介　**南本　史**　（みなみもと　ちか）
京都に生まれる。日仏学院を経て，京都大学仏文科の聴講生となり，フランス文学を学ぶ。おもな訳書に，「もしもしニコラ！」「うんがにおちたうし」「ママがもんだい」「最後の授業」「ポールの北極星」「ステーシーの頭のポケット」等がある。

画家紹介　**むかいながまさ**
1941年神奈川県に生まれる。上智大学イスパニア語科卒業。出版社勤務ののちフリーとなる。作品に「きょうりゅうが学校にやってきた」「パパ，ぼくの犬をかえして」「ヘンショーさんへの手紙」「わたしの犬を殺さないで」等がある。

にじ色のガラスびん

1992年4月30日　初版発行
1993年4月18日　第　5　刷

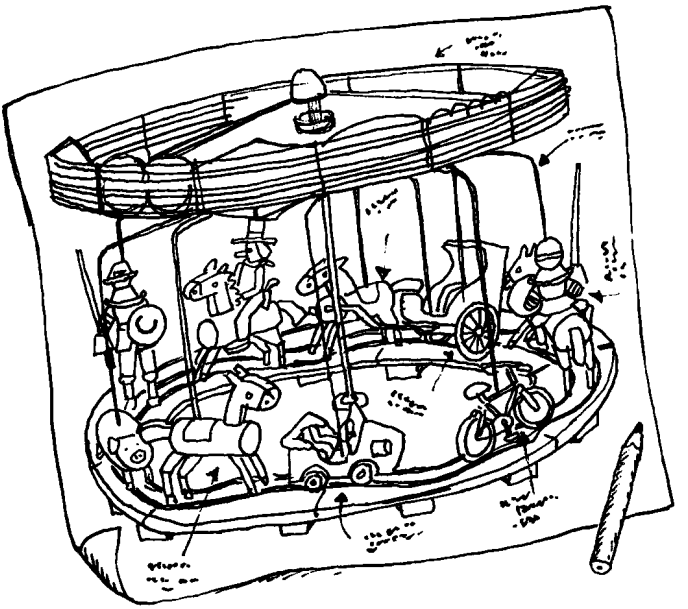
訳　者　南本　史
発行者　岡本雅晴
発行所　株式会社**あかね書房**
東京都千代田区西神田3-2-1　〒101
電話　03(3263)0641〈代〉
振替　東京3-64150
印刷所　新興印刷製本株式会社（本文）
錦明印刷株式会社（表紙）
製本所　株式会社難波製本

NDC953　150P　21cm　あかね世界の文学シリーズ

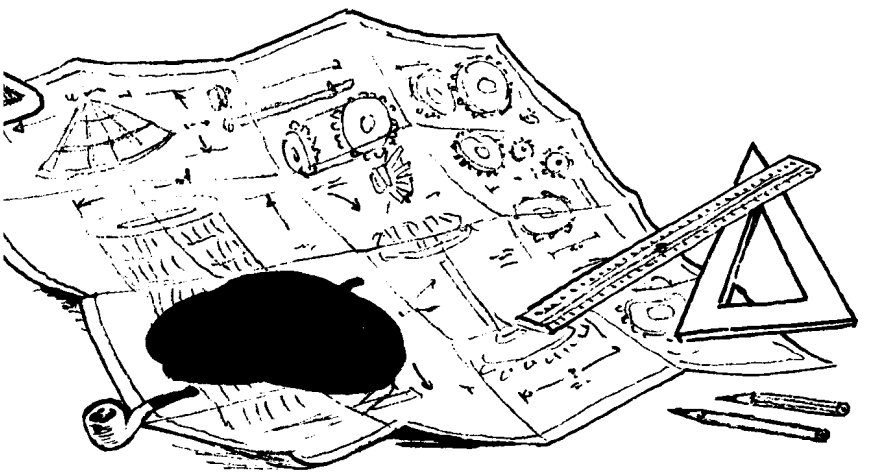
©1992 C.Minamimoto　Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取りかえします
定価はカバーに表示してあります
ISBN4-251-06253-1

にじ色のガラスびん

＊もくじ



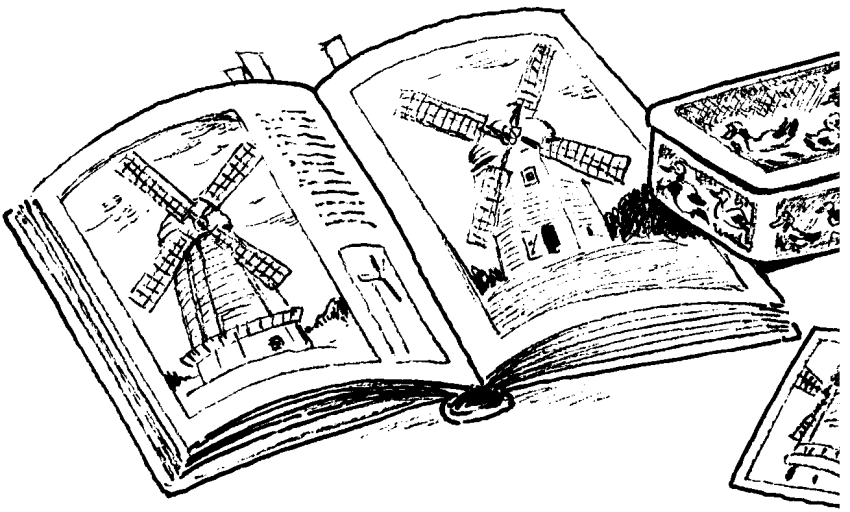
はじめに……6
1 ガラスの塔をせめろ！……14
2 あきびん作戦……34
3 まっ暗な夜……46
4 仲なおり……49
5 『へんくつジュニア』……59
6 ひとりぼっち……68
7 つめたい雨……73
8 あかされる秘密……77



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 大きなメリーゴーランド……88
10 ジャン・リュックが帰ってきた……101
11 病院の十二号室……110
12 おじょうさんのぼうし……120
13 記念写真……134
14 十一このガラスのかけら……141
おわりに……144
訳者あとがき……148

そうてい・さしえ／むかいながまさ



LE JOBARD by Michel Piquemal
Copyright©. 1990 Editions Milan
300 rue Leon-Joulin, Toulouse, France
Japanese translation rights arranged with
Editions Milan through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

にじ色のガラスびん

はじめに

すべては、ある四月の午後にはじまった……。

「みんな、かくれるんだ。音をたてるなよ。ジャン・リュックとピエールは、あのこわれた車の中に入れ。ミシェルは土手のうしろ……。ムールー、おまえはあきびんを目だつところにつむんだ！」

「あいつ、来るかな。」

「もちろんさ。やつは土曜日になると、いつも同じ時間にここに来るもの。」

「なあ、ブリス、こわくないのか？　あいつ武器を持ってるかもしれないんだぜ。おやじが言ってたけど、あぶないやつで、動くものはなんでもうつんだって。おまわりの顔をたたきわって刑務所に入ったこともあるんだってさ。」

「顔をたたきわったんじゃないよ。」
フィリップが訂正した。
「かみそりで腹を切りさいたんだよ。肉屋のおじさんがそう言ってたぜ。」
「あいつが銃を持ってたりしたら、おれ、帰る。うたれるのはいやだもん。」
仲間たちはみんな、ぴりぴりしている。
「平気だよ。ミシェルと、ここんとこずっとやつを見はってたんだ。だけど、このごみすて場に来るときに銃を持ってたことなんかなかったぜ。」
ぼくはみんなを安心させてやった。
「しーっ。」
チビが言った。
「バイクの音だ。」
「色はわかるか？」
「青だ。うしろにかごがついてる。」
「やつだ。『へんくつ』だ。みんな、静かにしろ！　いいか、合図するまで絶対に動くなよ。」

バイクは、両側にビニール袋やごみがおいてある小道に入ってきた。あたりはしんと静まりかえっていて、聞こえるのはバイクの音だけ。ぼくらは自分の位置についた。のこくずの山や、古いドラム缶のうしろにまわりこんで、身をひそめたんだ。

生ごみがはみだしているごみ袋のうしろに、ぼくはうずくまって、息をころした。そして、いらいらとてのひらで愛犬レックスをなでた。この計画をたてたのはぼくなんだもの。うまくやらなきゃ！

『へんくつ』は、ごみの山をさっと見わたすと、ぼくらがつんでおいたあきびんのそばに来て、たちどまった。にやーっとしてる。あいつにとっちゃ、たからの山だもんな。ぼくは、じいさんが荷台のかごをはずすのを待って、レックスのしりを思いっきりたたいた。

「よし、行け！」

レックスは、わんわんほえながら、じいさんに向かって走っていく。これを合図に、みんなは、

「わーっ！」

とさけんで、かくれ場所からとびだし、びんの山めがけて石を投げつけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ガシャーン！　バリーン！　あちこちでびんがわれる。
じいさんは一瞬おどろいたようだが、すぐ、こぶしをふりかざしてぼくらをおどかした。
「やめんかっ！　この悪がきども！」
雨のようにふってくる小石をものともせずに、じいさんはかごにびんをつめようとするが、うまくいかない。やっと一本つかんだ、と思ったとたん、石がとんできて、びんがわれてしまう。
「おい、おまえら、いいかげんにせんか！」
ぼくらはばっちり用意してきたから、小石は山ほどある。ふんばっていたじいさんも、こらえきれなくなったらしい。とんでくる小石をよけながら、ガラスのかけらしか入っていないかごを持ち、バイクをおしてひきかえしていく。
「やったぜ！」
ムールーがさけんだ。
「おれたちの勝ちだぞぉ！」
「びんがほしけりゃ、」

とジャックが追いうちをかけた。
「ほら、これでも持ってけよ。」
じいさんめがけてジャックが投げつけたびんが、荷台の金具にあたってわれた。じいさんはふりむいた。おっかない顔をしている。
「やる気か？　よーし、そこを動くなよ！」
じいさんは太い棒をつかんだ。と、バイクをおいて、棒をぐるぐるまわしながら、ぼくらにおそいかかってくるじゃないか。
まずいことになったぞ。みんなはしかたなく、ぽんこつ車のうしろに避難した。『へんくつ』は、ぼくらのすぐそばまで来ると、思いっきり車のボディをたたいた。ごみすて場じゅうにすごい音がひびきわたった。そのとたん、棒がぽっきりおれてしまった。じいさんは急いでひきかえしていく。
ぼくらは、その背中めがけて、また石を投げまくった。
「やりたきゃいつでも相手になってやる。」
じいさんがぶつぶつ言ってるのが聞こえてくる。

ぼくは、ごみ袋の山の上に仲間を集めた。
「きょうはうまくいったけど、あいつ、まだやる気らしいな。こうなったら、あとにはひけない。とことんやろうじゃないか。例の地下室に、水曜日（フランスの学校は水曜日と日曜日が休み）の二時に集まろうぜ。」
仲間はみんな、ぼくのかたをたたいて言った。
「やるじゃないか。」
ミシェルを送っていってから、ぼくはレックスのスピードにあわせて、ゆっくり自転車をこいだ。
こんなにうまくいったのに、なんだかおもしろくない。家に帰ったって、だれもいないんだもんな。母さんは病院につとめていて、土曜日もおそくまで仕事がある。父さん……。父さんはずいぶん前に家を出ていったきり帰ってこない。まあ、レックスがいるからいいけど。
ぼくは自転車置き場に自転車をおしこんだ。
「なあ、レックス、ぼくの気持ちがわかるのはおまえだけだよ。」
レックスは、ぼくのうでにとびつき、顔をなめた。

「おいで、晩めしだぞ！」
ぼくらは階段をフルスピードでかけあがった。そのはずみにレックスは、前をのぼっていくデュピュイさんの買い物かごをひっくりかえしてしまった。
「気をつけろ！　けっとばされたいのか。」
でぶのおじさんが、トマトをひろいながらわめいている。
ぼくはあかんべえをして、おどり場がふるえるほどのいきおいでドアをしめた。

1　ガラスの塔をせめろ！

母さんは、日曜日の朝になると大そうじをする。モップでゆかをふいているときにそばをうろうろすると、いやがられるから、ぼくはレックスをつれて外に出た。ミシェルのところに行ったけど、いない。とくにすることもないので、『へんくつ』のすみかの方へぶらぶら歩いていった。

あいつ、とてつもなく広い、草ぼうぼうのところにすんでいるんだ。まわりの土手の上半分には鉄条網がはってある。マルセーユ郊外であき地といえば、ここしかないんじゃないかな。ビルをたてるために高い値段で買いとりたい、という人もいたそうだ。でも、あいつはことわったんだって。やっぱり変わってるんだろうな。ぼくだったら、さっさと売って、テラスと庭のあるすてきな家を買うのにさ。

じいさんがすんでいるぼろ家ときたら、家なんてもんじゃない。れんががつんであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com